人の兄弟あり。弟九歳後に平右衛門と云ひ、此子を甲斐守といふ。甲斐の子を左京といへり。平右衛門は五十餘歳、甲斐は二十二歳也。左京は二十一歳にて病死す。石見守の內室は、利家卿の御妹にて、御死去の後、高畠平右衛門下屋敷に一寺建立有りて、長久寺と名付けたり。元和九年に高畠左京死去の時、家老共長久寺へ寄合ひて、戒名を住持に書かせけるに、かやうに何茂若死被ㇾ成、追々小身に成り給ふ事、にが〳〵しき次第哉と、和尚笑止がりけるに、家老堀田新右衛門申しけるは、先年平右衛門殿死去の時は、日蓮宗法蓮寺にて葬送の相談有ㇾ之處に、跡繼甲斐殿禪宗になられけるゆゑに、宗旨の跡次無ㇾ之ては、導師する事不ㇾ罷成」よし住持申しければ、左京弟の猿松を宗旨の跡次に可ㇾ仕旨申入れ、色々扱ひにて法蓮寺にて葬送究りけり。然るに法蓮寺にて法會有ㇾ之時、諸事の規式を逆に執行し、行道を折りて調伏したりと風聞したり。猿松殿も左樣の事を聞かれ候て、甲斐殿・左京殿と同宗に成り給ふ。然るゆゑにや有りけん、三代共に若死相つゞく事苦々敷と物語申しけるが、猿松は後主膳と稱し、千石の身代と成り、杉江兵助の聟と成り、三歳の女子一人を殘し、二十五歳にて果てられたり。高畠黨の內に法華經信心の方々は、于ㇾ今殘りて家繁昌す。宗門替りたるは惡しゝと、寬永の初の頃まで是を證據にして、日蓮宗の談義は益盛んになりたりとぞ聞えけると云々。また享保錄にも、一奇談を載せたり。高畠木工菩提所高岸寺へ參詣するに、住持の說話に曰く、吾が宗旨に非ざれば成佛し難しと、段々宗意を解かれたり。其頃藩主松雲公逝去し給ふ折なれば、木工曰く、我が君此節逝去し給へり。上人の說の如くならば、必ず我が君も地獄へ至り給ふべし。我が父祖より君の恩祿を受け、妻子をはごくみ安穩なるも、是君の重恩也。生きて恩を報せずんば、死に至りて報い奉らん。吾極樂へ往き、君を地獄へ落し奉らん事、本意に非ず。今日より改宗して亡君と共に獄卒とならんというて、既に座を起ちける處、高岸寺住職甚だ打驚きて、高畠木工をば引留め、種々言葉を盡し詫言して改宗を止めけり。實に高畠氏の氣象押して知るべし。とあり。或は云ふ。諸宗の中にも日蓮宗の僧徒は、今世にもかゝる徒多しといへり。

○法蓮寺廢跡

延寶の金澤圖に、泉野寺町高岸寺の向に、法蓮寺前口二十六間奥行四十五間とありて、今大圓寺の寺地是也。法蓮寺は法華宗にて、京都本國寺の末なり。寬永三年に德川二代將軍秀忠公上洛に付き、中納言利常卿も上洛し給ひ、本國寺を旅館とせらる。此の時本國寺の弟子僧日翁と云ふもの、太平記理盡鈔を相傳し居たるに依つて、利常卿本國寺に滯在し給ふ間、日翁より御相傳申上げたり。故に利常卿金澤に歸城し給ふ後、日翁を金澤へ招き寄せられ、泉野に於て寺地を賜はり、一寺を建立す。寺號を法蓮寺と號し、則ち日翁開祖となりしが、元祿十二年五月住職不埒之儀に付寺破却相成り、翌十三年寺跡を大圓寺住職心岩和尚に賜はり、大圓寺をば跡地に移轉建立すといへり。今大圓寺門內に戸室石の燈籠二基左右に建てたり。寺傳に云ふ。是法蓮寺の遺器なりと。右燈籠に寶永五戊子歳八月日と彫刻す。按ずるに、寶永は元祿以後の年號なり。法蓮寺破却後に建てたるなれば、法蓮寺の遺器といひ傳ふもの、恐らくは過聞ならんか。

○法華法印日翁傳

石野氏筆記に云ふ。太平記理盡鈔は楠長俊の家に傳はり、長俊の末葉名和松三といふ者、京都本國寺の近邊堀川通りの町屋に居住し、朝暮之を讀みたり。法華法印日翁は本國寺に住居し、是も太平記を好んで讀みたりけり。名和松三曰、此書代々相傳して吾に至れり。貴僧好んで太平記を讀み給へり。此書に秘傳あり。我が朝に知る人少くして絕えなん事を歎く。出家は高位高官にも近寄り給ふもの也。若し國主などに近寄り給はゞ御傳授候へとて、則法印に傳授す。然るに其後中納言利常卿上洛し給ひ、本國寺をば旅館となし、寺內に滯在し給へり。此時本國寺の上人被二申上一けるは、拙僧弟子の內、武家方に御聞被ㇾ遊專用の事を能く存知罷在者有ㇾ之候。御慰に物語を御聽聞可ㇾ被ㇾ遊哉と被二申上一處、則彼者を被二召出一、物語共御聽聞被ㇾ成けるに、甚御意に應じ、金澤へ召連れられ、御咄衆に被ㇾ成。泉野法蓮寺の開山にて、大運院權大僧都日翁と號し、終に爰にて遷化なり。法印理盡鈔の弟子、伊藤外記・小原惣左衛門・大橋新丞。小原は後入道して宗惠と改め、大橋は後入道して善加